An aerial photograph of a historic town, likely Dubrovnik, showing a dense cluster of buildings with red-tiled roofs. The town is built on a hillside, and the sea is visible in the background. The image is used as a background for the text.

世界遺産都市を歩く

第6回

# 意志 住み続けることの

市壁をもつ港町  
ドウブロブニーク

写真1 プラツァ通りの東端より西を見る。かつては小島(左)と陸地(右)とを分かつ水道だったところである。

文・写真  
西村幸夫  
東大教授



アドリア海の北の海岸に降り立った蝶のような華麗な港町——私にはこのまちはそう見える。南にひらける海に向こうはイタリア、長靴のくるぶしあたりのところである。古くからローマ帝国、その後はベネツィア共和国の強い影響下にあったことがうなずける。

全長1940mの市壁が完璧に残っている都市は地中海沿岸でも珍しい。このアドリア海の真珠は、614年に海岸線を10kmほど東に下ったところにあつた、おそらくはかつてギリシアの植民都市だったエビダウルム（現在はツァヴァット Cavtat という小港町）が中央アジアから西下してきた遊牧民たちによって滅ぼさ



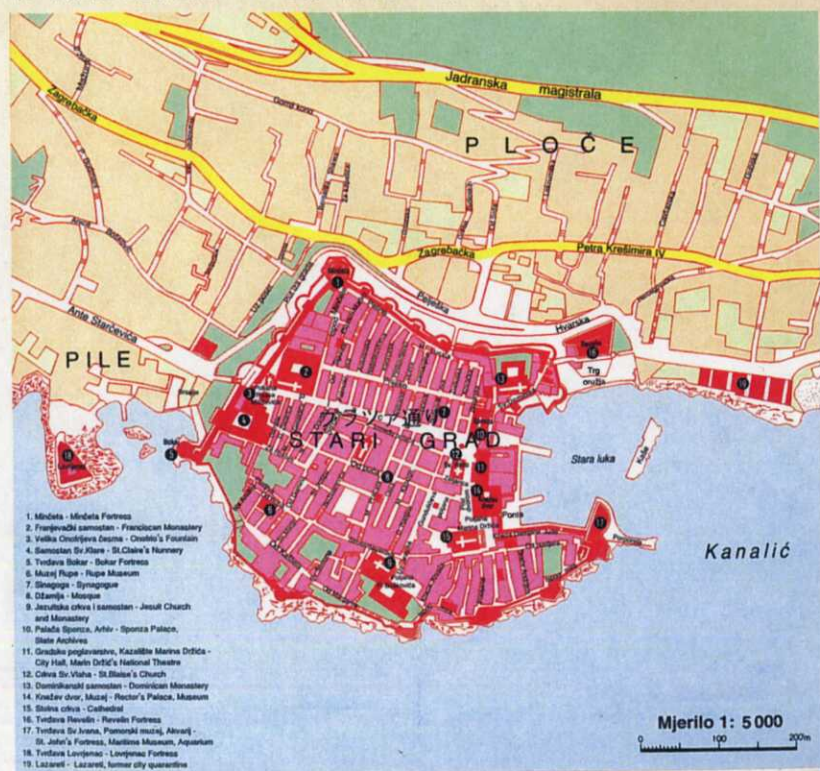
写真2 ドゥブロブニクの守護聖人である聖ブラシウスの日（2月3日）の祝祭でぎわうブラツァ通り（出典：参考文献）

い。そのうえに港の機能を併せ持っているのである。なぜこのようなま

ちが造られ、今日まで命脈を保ってきたのか。

このアドリア海の真珠は、614年に海岸線を10kmほど東に下ったところにあつた、おそらくはかつてギリシアの植民都市だったエビダウルム（現在はツァヴァット Cavtat という小港町）が中央アジアから西下してきた遊牧民たちによって滅ぼされた

図1 ドゥブロブニクの市街図、市壁の内部は当初の世界遺産地区である。のち、1994年に周辺部も世界遺産のコア地域に編入された。



れた際に移り住んだ住民によって拓かれたと考えられている。現在の市壁内の東南部の小高いあたりがかつては小島で、そこが避難民であるギリシア人やローマ人たちの居住地になつたようである。対岸の陸地側にはそれ以前からスラヴ人が住んでい

た。以降、水道両側の集落は埋め立てを繰り返しつつ次第に拡大し、11世紀終わり頃にはついに陸続きになつた。そしてその名残が現在の目抜き通り、東西に走るブラツァ通りである。都市は13世紀には現在の形をなし、経済的にも地中海の重要な拠

写真3 市壁の上から見たブラツァ通り（西より）。

点都市となつていった。

ドゥブロブニクの市内の中央や北を東西に貫通しているブラツァ通りはこの都市を貫通する唯一の通りであり（写真1）、またもつとも幅員の広い文字通り都市の基軸である。そしてここは祝祭の舞台でもある（写真2）。

不思議なことにこの通りは東から西に行くにつれて次第に幅員が小さくなっている。港から上陸した旅人はスポンザ宮殿前の広場に立って、西に向かって延びているブラツァ通りを眺め、パースベクタイプが強調されたドラマチックなその街路風景に魅了されたことだろう。

古代からの歴史を持った都市がその中心部にこのような明快で大規模な軸線を持っているのはいかにも不思議であるが、この通りがかつてアドリア海に抜ける水道であったと考えると合点がいく。そこはまた北側と南側の急な斜面が落ち合うところでもある。ブラツ

ァ通りを蝶の胴体と考えると、両側の斜面はさながら華麗な蝶の羽根である。ブラツァ通りを境に北側と南側とで街路パターンが明らかに違うところも、さらにはもつとも古いと考えられる東南隅から南部にかけてがより有機的な細街路網から成っているところも、その意味するところはよく分かる。重層する歴史がそのまま街路のパターンとして空間を構成しているのである。もうひとつ不思議なことは、これだけの歴史都市でありながら、ブラツァ通り沿いの建物がじつに平明で均質なことである。裏通りの迷路とは対照的だ。

これにももちろん理由がある。ドゥブロブニクは1667年に起きた大地震によって大きな被害を受けた。復興の過程で中世的なブラツァ通り（もともとはギリシア語およびラテン語で Platea、道路を意味している）は見事に改変され、バロックのファサードの町並み、高さや壁面線の揃った街路空間が生まれたのである。通り両側

図2 1991年10月から12月の砲撃による被弾箇所を示した図。(出典：参考文献2)



図3 1991年10月から12月の砲撃による建物の被害を示した図。(出典：参考文献2)



このようにドゥブロブニクが東南ヨーロッパにおける重要な歴史都市であることは周知の事実であったにもかかわらず、いやむしろそうだからこそ、この都市は1991年のユーゴスラビア連邦共和国の崩壊とクロアチア共和国の独立という事態において、クロアチアの文化の象徴として旧ユーゴ人民軍の砲撃の標的となったのである。

冷戦の終結を契機とした旧ユーゴスラビアの内戦は1991年に勃発した。ドゥブロブニクでも1991年10月から1992年秋にかけて旧ユーゴ人民軍の破壊行為が続けられた。ドゥブロブニクは戦争による不意な破壊を避けるために1970年代初期以降、軍事施設は設置されていなかったが、旧ユーゴ側はクロアチアの独立を阻止するため、その文化の象徴であるこの都市への攻撃を敢行したのである。破壊は陸と海から、陸軍による砲撃と海軍の軍艦による艦砲射撃で(図2)、そのピークは1991年の10月から1月にかけてだった。



写真4 ブラツツァ通り東端から西を観る

の建物は間取りも統一され、1階平面には商店を配することも定められた。こうした計画とデザインは今日まで受け継がれ、街路の賑わいを生み出している。

都市全体は13世紀以来、市壁で四周を完全に囲われている。この市壁はその後、砦を加えるなど幾多の改良はなされたものの、現在も全体がそのまま残されている。市壁の厚さは陸地側では4mから6mに及び、その外側には空堀が掘られている。壁の高さは高いところでは25mにまで達している。今日、市壁の上部はぐるっと一周することができるようになっており、この歴史都市をあらゆる角度から俯瞰できるまたとないタウントレイルのルートとなっている(写真3)。

ドゥブロブニク旧市街は1979年に世界遺産に登録されている。世界遺産条約は1975年に発効し、

1978年から世界遺産の登録を開始している。ドゥブロブニクの世界遺産登録は2年目という早い段階で実現した。当時はまだ世界遺産の登録のプロセスが現在のようには確立していなかったため、イコモスによる評価もきちんとした形では残されていない。世界遺産委員会でも大きな議論もされなかったようである。このような貴重な歴史都市が世界遺産に登録されるのは当然だという認識だったのだろう。なお、申請した当時のユーゴスラビア側の文書を見ると、ドゥブロブニクは欧州中世の建築と都市計画の貴重な成果であり、アドリア海沿岸やバルカン半島の都市に多大な影響を与えたという点を強調している。世界遺産申請時点の旧市街の居住者は5255人であった。

1994年に市壁の外側の中世時代に発達した東・北・西に隣接した郊外部分、さらに南沖に浮かぶ島嶼部分まで、この計画都市の一部であったという理由でコア地域へと編入された。

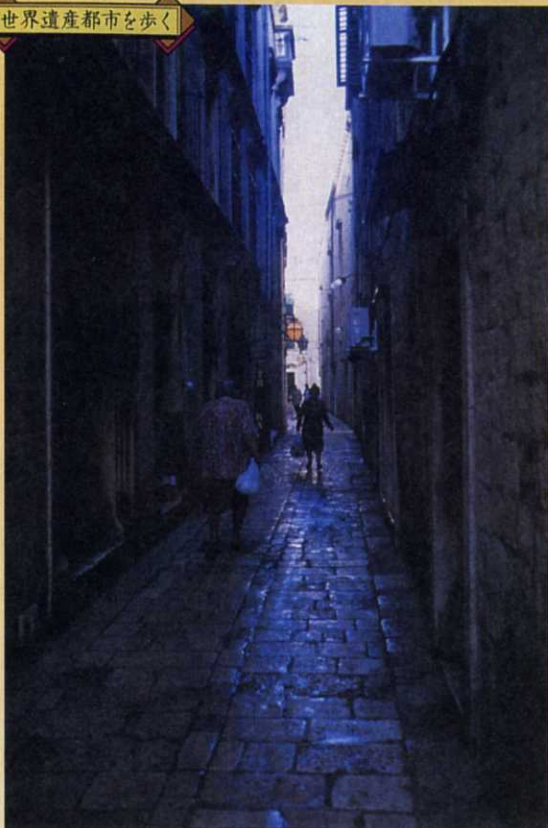


写真8 写真6と同じ通りの2001年の様子。

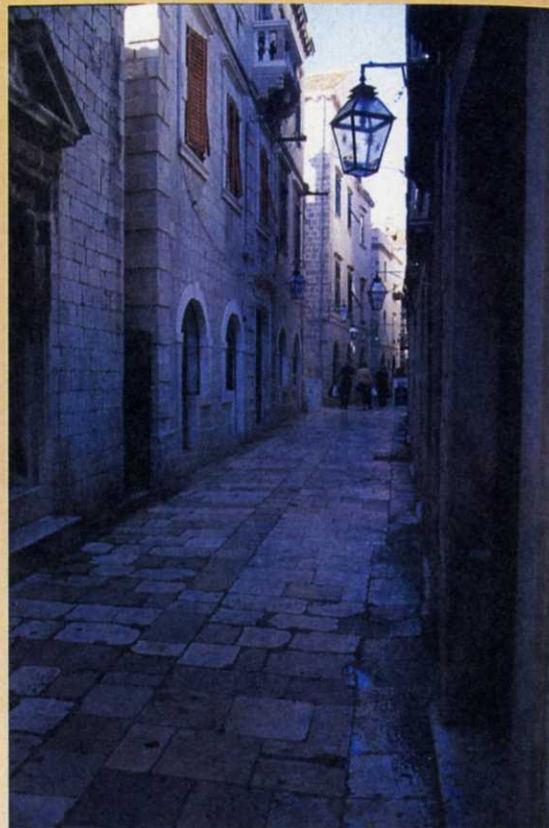


写真7 写真5と同じ通りの2001年の様子。

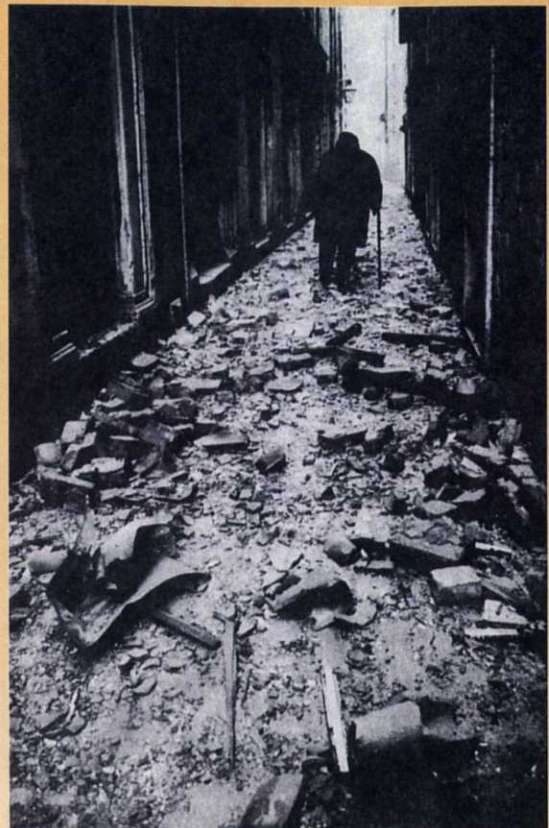


写真5(右)・6(左) 1991年12月6日、旧ユーゴ人民軍による爆撃直後の旧市街の通り(出典:参考文献2)



写真10 1991年12月7日、爆撃翌日のブラツァ通りの様子。それでも市民はドゥプロブニクに止まっていた。(出典:参考文献2)



写真9 1991年12月6日、旧ユーゴ人民軍による爆撃直後のブラツァ通りの静まりかえった様子。(出典:参考文献2)

この破壊行為により、7757戸の住宅が被害に遭い、うち539戸が全壊、1051戸が半壊だった(図3)。車両の破壊は863台、港の船舶の破壊は750隻と報告されている。砲撃によって92人の市民が死亡、225人が負傷している。被害総額は10億ドルにのぼると見積もられている。1991年の11月には長期間にわたり停電と断水が続いた。なぜこれほど多くの市民が犠牲になったのか。それは、内戦のさなか、一時的な避難があったものの、ドゥプロブニク市民の多くがこのまに止まろうとしたからである。当時、ユネスコから現地に派遣されたイコモスの専門家コーリン・カイザー氏は次のように述べている。

「1991年11月から12月にかけてユネスコ・オブザーバーとしてドゥプロブニクに派遣された私は多くの住宅を訪れた。その多くは Poljana Mirvo Zvono 地区にあり、私が会った市民のなかには、戦争で大げがをしたものもいた。多くの市民は、社会学者が言うところの『低所得者層』であった。ドゥプロブニク旧市

街地は彼らにとって故郷であり、ほかにどこにも行くところがなかった。それ以上に、彼らはどんな困難が待ち受けていようと、ここにとどまることを望んだのである。」(参考文献2, 89頁)

もっとも激しかった1991年12月6日の爆撃の様子は記録に残されている(写真5、6)。同じ場所に私は10年後に訪れた(写真7、8)。その頃には、砲弾の痕は注意してみなければ気がつかないほど、被害の爪あととは消えかかっていた。

しかし、私たちは爆撃翌日(1991年12月7日)のブラツァ通りの悲惨と市民の絶望、しかしすぐに始まった復旧の光景(写真9、10)を忘れないようにしたい。人と人、国と国をつなぐとばかり思われている文化や伝統が、まさにその存在の固有性のために、他の民族の人にとって破壊の対象となるという事実を忘れてはならない。

と同時に、抛り所となる都市を間髪おわずに復旧しようとする市民の姿も心に刻んでおかなければならない。住み続けることへの強い意志が

この都市を甦らせたのである。

今は観光客で日夜賑わっているこのまちの通りが、こんな悲惨な被害に見舞われたのは、わずか17年前のことなのだ。

ドゥプロブニクは内戦のさなかの1991年に危機に瀕した世界遺産リストに載せられ、全世界に対して歴史地区の保存を訴え、被害建物の緊急修復措置が講じられた。危機リスト搭載は復興が一応の軌道に乗る1998年まで続いた。

2005年1月31日、国連安保理の決議によって設置された旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷(ICTY、在オランダ・ハーグ)は、セルビア人による民族浄化の犯罪の一環として、ドゥプロブニク旧市街の市民の殺傷、都市の歴史的文化的遺産の意図的破壊の罪で、旧ユーゴ人民軍の司令官 Pavle Strugar に禁固8年の刑を言い渡した。2006年9月15日、被告は控訴を取り下げ、刑が確定した。

ドゥプロブニク市民の住み続ける意志が勝利したともいえるだろう。



ドゥブロヴニク旧市街の東側の港風景。市壁のアーチが見える



ドゥブロヴニク旧市街の街路風景。

## ●注

\*1 1991年の内戦当時、ドゥブロヴ

ニク旧市街地の人口は4万9728人、このうちカトリックのクロアチア人が82・4%、ギリシア正教徒のセルビア人が6・8%、イスラム教徒が4%だった。(参考文献5)

\*2 参考文献2による。クロアチア赤十字によると内戦による被害者総数は死亡した市民114人とされている。

## ●参考文献

- 1 Artun Revićka, Dubrovnik - history, culture-art heritage, Forum-Zadar, 1998
- 2 Matica Hrvatska Dubrovnik ed., Dubrovnik in War, 10th edition, Dubrovnik, 2001
- 3 ユネスコ世界遺産センター資料
- 4 ヨーロッパ評議会文化教育委員会クロアチアおよびボスニアヘルツェゴビナ関連資料
- 5 国連安全保障理事会ドゥブロヴニク関連資料